

DERWENT-ACC-NO: 1986-256015
DERWENT-WEEK: 198639

Japanese '526

COPYRIGHT 2005 DERWENT INFORMATION LTD

TITLE: Two-part pigmented paste - comprises pigmented epoxy!
resin and curing agent

PATENT-ASSIGNEE: NEMOTO TOKUSHU KAGAKU KK [NEMON]

PRIORITY-DATA: 1985JP-0024359 (February 13, 1985)

PATENT-FAMILY:

PUB-NO	PUB-DATE	LANGUAGE	PAGES	MAIN IPC
JP 61185526 A	August 19, 1986	N/A	009	N/A

APPLICATION-DATA:

PUB-NO	APPL-DESCRIPTOR	APPL-NO	APPL-DATE
JP 61185526A	N/A	1985JP0024359	February 13, 1985

INT-CL (IPC): C08G059/32

ABSTRACTED-PUB-NO: JP 61185526A

BASIC-ABSTRACT:

2-part First paste contains as principal agent: Bisphenol A and phosphorescent pigment of the zinc oxide type with a further additive: hydrated silica. To 100g each of the principal agent and the phosphorescent was added 6g of the additive, and these were homogeneously mixed to give the first paste. Second paste contains as curing agent: polythiol and phosphorescent pigment of the zinc oxide type with further additive of hydrated silica. To 100g each of the curing agent and the phosphorescent was added 6g of the additive, and these materials were homogeneously blended to give the second paste. The first and second pastes were mixed in equal amt., and blended to give homogeneous mixt., which was then shaped. By leaving it to stand for about 30 mins., curing was completed to give a desired shape for practical use.

Pref. phosphorescent pigment is added in a ratio of 50:50 wt. pts. relative to principal agent and a curing agent.

ADVANTAGE - The first paste consists of a main agent, and the second paste consists of a curing agent. These are prep'd. separately and hardened during storage is prevented.

CHOSEN-DRAWING: Dwg. 0/0

TITLE-TERMS: TWO-PART PIGMENT PASTE COMPRISE PIGMENT POLYEPOXIDE RESIN CURE AGENT

DERWENT-CLASS: A21

CPI-CODES: A05-A01B1; A08-D; A08-E01; A12-W11H;

POLYMER-MULTIPUNCH-CODES-AND-KEY-SERIALS:

Key Serials: 0183 0226 1282 3183 1373 1601 2020 2198 2208 2285 2301 2321 2493
2733

Multipunch Codes: 014 02& 08 10- 15- 199 220 221 226 231 305 336 341 359 364
365 400 473 48- 546 623 624 720 721

SECONDARY-ACC-NO:

CPI Secondary Accession Numbers: C1986110637

⑯日本国特許庁(JP)

⑪特許出願公開

⑫公開特許公報(A) 昭61-185526

⑬Int.Cl.⁴

C 08 G 59/32

識別記号

厅内整理番号

6946-4J

⑭公開 昭和61年(1986)8月19日

審査請求 未請求 発明の数 1 (全9頁)

⑮発明の名称 着色ペースト

⑯特 願 昭60-24359

⑰出 願 昭60(1985)2月13日

⑱発明者 鈴木 清 東京都杉並区上荻1-15-1 丸三ビル 根本特殊化学株式会社内

⑲出願人 根本特殊化学株式会社 東京都杉並区上荻1-15-1 丸三ビル

⑳代理人 弁理士 黒田 博道 外1名

明細書

1. 発明の名称

着色ペースト

スト。

6. 領料として、パール顔料を2~10重量% 添加した特許請求の範囲第1項記載の着色ペースト。

7. 領料として、有機顔料を2~5重量% 添加した特許請求の範囲第1項記載の着色ペースト。

8. 領料として、螢光顔料を2~5重量% 添加した特許請求の範囲第7項記載の着色ペースト。

3. 発明の詳細な説明

【産業上の利用分野】

本発明は着色ペースト、更に詳しくは2つに分けてチューブもしくはピン等に入れ、それらを混合することによって簡単にプラスチック成形品を形成することができる着色ペーストに関し、アクセサリー、釣具、家具等に容易に付着させることができるものである。

【従来の技術】

従来より、プラスチック製品はいずれも完成品として販売されていたために、購入者は販売品の

2. 特許請求の範囲

1. エポキシ樹脂を主体とする主剤と、この主剤を硬化させるための硬化剤とを別体に形成すると共に、これら的一方または双方に顔料を添加したことを特徴とする着色ペースト。

2. 顔料を、螢光顔料とした特許請求の範囲第1項記載の着色ペースト。

3. 螢光顔料を、主剤及び硬化剤に対して50~150重量% 添加した特許請求の範囲第2項記載の着色ペースト。

4. 助剤として、主剤及び硬化剤に微粉けい酸類を主体とする分離、沈降防止剤を2~10重量% 添加した特許請求の範囲第3項記載の着色ペースト。

5. 螢光顔料を、主剤のみに50~150重量% 添加した特許請求の範囲第2項記載の着色ペー

中から選んで購入することしかできなかった。

特に、暗所においても光を発することから、時計の針、キーホルダーあるいは壁掛けスイッチ等に用いられていた蓄光体は、工場で時計の針に塗布されたり、あるいはキーホルダー、壁掛けスイッチに成型され、すべて完成品としての状態で出荷されていた。

【発明が解決しようとする問題点】

このような各種のプラスチック製品は、アクセサリーあるいは実用小物として用いる場合には、完成品のみならず、自由なデザインのものを作りたいとの要求があるにも係らず、従来は提供されていなかった。

また特に、蓄光顔料をプラスチックに加えた蓄光体は、暗所において光を発するという特徴より、前述したような用途に限られることなく広範な用途に用いることが可能であり、かつそのような需要があるにもかかわらず、従来は完成品としてのみ出荷されていたために、そのような需要に答えることができなかつた。

本発明に係る蓄光ペーストは、エポキシ系樹脂を主体とする主剤と、ポリアミド等を主体とする硬化剤とを別体として形成し、これら主剤及び硬化剤の一方または双方に顔料を加えたものである。

次に顔料として蓄光顔料を用い、かつこの蓄光顔料を主剤及び硬化剤の双方に加えた場合について説明する。

主剤としては、エポキシ樹脂を主体としたものを用いる。例えば、ビスフェノールA、ビスフェノールF、レゾルシノール、フェノールノボラック、クレゾールノボラック等のフェノール類のグリシジルエーテル、

ポリエチレンジリコール、ポリプロピレンジリコール等のアルコール類のグリシジルエーテル、フタル酸、イソフタル酸、テトラヒドロフタル酸等のカルボン酸類のグリシジルエステル、

アニリン、イリシアヌール酸等の空素原子に結合した活性水素をグリシジル基で置換したもの等のグリシジル型エポキシ樹脂、

それらの原因としては、使用前に硬化してしまうので、実用的でないものであると共に、特に蓄光ペーストは、蓄光顔料の比重が主剤あるいは硬化剤の比重よりも重いために、蓄光顔料が徐々に沈降してしまい使用できなくなってしまうことにあった。

そこで本発明は、前述した問題点を解消するために、硬化を防止して長期間の使用に耐えると共に、特に比重が重い蓄光顔料に対しては、その沈降を防止し、長期間安定して使用可能とした着色ペーストを提供することを目的として創作されたものである。

【問題点を解決するための手段】

そこで本発明は、上記目的を達成するために、硬化を防止するために、主剤と硬化剤とを別体として形成すると共に、これら主剤及び硬化剤の一方又は双方に顔料を添加したことをその要旨とする。

【実施例】

以下、本発明の実施例を説明する。

分子間のオレフィン結合を過酸等でエポキシ化して得られる脂環型エポキシ等を用いることができる。

またこの主剤の粘度を低下させるための添加剤としては、反応性稀釈剤としてのエポキシ基を持っている低粘度樹脂、非反応性稀釈剤としてのエポキシ基を持たない低粘度樹脂、耐水性、耐熱性を向上させるための添加剤としては、変性剤としてのフェノール、キシレン等がある。

硬化剤としては、エポキシ樹脂を硬化させるものであって、脂肪族または芳香族ポリアミン、ポリアミド、ポリメルカプタン、ポリカルボン酸無水物、BF₃-モノエチルアミン錯化合物等を用いることができる。

またこの効果剤の粘度を低下させるための添加剤としては、非反応性稀釈剤を用いることもできる。

蓄光顔料としては、硫化亜鉛系蓄光体を用いることができる。

このような主剤及び硬化剤に対して、蓄光顔料

を50～150重量%添加すると共に、これに添加剤として、分離防止剤、沈降防止剤としての効果を有する微粉けい酸類を2～10重量%添加する。着光顔料の添加量が50重量%以下であると十分な着光性能を發揮することができず、逆に150重量%以上であると、ペースト状態の維持が困難となるものである。また添加剤を2重量%以下とすると主剤及び硬化剤と着光顔料とが分離し易く、逆に10重量%以上添加すると作業性が悪くなるものである。

またここで添加剤としての微粉けい酸類としては、含水けい酸、含水けい酸カルシウム、含水けい酸アルミニウム等を用いることができる。なおこれら微粉けい酸類の粒子径は、5～100μであり、かつ30～300のBET表面積を有するという特徴がある。

これらの各材料を、攪拌して着光顔料を加えたペースト状の主剤と、着光顔料を加えたペースト状の硬化剤とを得るものである。

また実際の使用時には、これら着光顔料を加え

後、それを硬化剤にて硬化させて使用することができる。

主剤、硬化剤、着光顔料は、前記実施例と同様なものを使用することができるので、詳細な説明を省略する。

また更に添加量等も同様なので、説明を省略する。

このようにして得た着色ペーストは、イアリング、ブローチ等の装飾品等として用いることができるだけでなく、特に着光顔料を用いたものは、釣具等の夜間識別部品として使用できる。

次に実際に使用した樹脂、顔料及び混合量等を明示した実施例について説明する。

[第1実施例]

第1実施例

第1ペースト

主剤 ビスフェノールA

着光顔料 硫化亜鉛系着光体

(G-S-S: 根本特殊化学製造)

添加剤 含水けい酸

たペースト状の主剤と、着光顔料を加えたペースト状の硬化剤とを混合して、所定の形状とすることによって、5～60分の時間経過で硬化することとなる。

なおこれら着光顔料を加えたペースト状の主剤及び着光顔料を加えたペースト状の硬化剤を別々にチューブに充填する場合は、作業効率の点より、加熱して粘度を低下させて行なうことが望ましい。

次に、顔料として着光顔料を用いるものの、この着光顔料を主剤のみに混合する場合について説明する。

このような使用に関しては、例えば異った色の着光顔料を添加した主剤、あるいは異った色の着光顔料、パール顔料、有機顔料を添加した主剤を多數用意しておき、これら多數の主剤に対して单一の硬化剤を使用するような場合に適している。即ち、通常販売されている鉛の具のように、多數の色の主剤を用意して、それら各色の主剤を単独で、あるいは混合して所望の色を作り出した

を、主剤及び着光顔料を各々100gに対して、添加剤を6gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌した均一に混合し、第1ペーストを得る。

第2ペースト

硬化剤 ポリチオール(錫コニン製)

着光顔料 硫化亜鉛系着光体

(G-S-S: 根本特殊化学製造)

添加剤 含水けい酸

を、硬化剤及び着光顔料を各々100gに対して、添加剤を6gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第2ペーストを得る。

このようにして形成した第1ペースト、第2ペースト各々は、各々同一量づつを十分攪拌して均一に混合し、所定形状にすると、その後30分程度で硬化し、実用に供することができる。

[第2実施例]

第1ペースト

主剤 ビスフェノールA

着光顔料 硫化亜鉛系着光体

(G-S-S: 根本特殊化学製造)

添加剤 ディスパーサー202

(日本光研工業製)

を、主剤及び着光顔料を各々100gに対して、添加剤を5~0.1g、望ましくは1gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第1ペーストを得る。

第2ペースト

硬化剤 ポリチオール(飼コニシ製)

このようにして形成した第1ペースト、第2ペースト各々は、各々同一量づつを十分攪拌して均一に混合し、所定形状にすると、その後30分程度で硬化し、実用に供することができる。

[第3実施例]

第1ペースト

主剤 ビスフェノールA

着光顔料 日本螢光化学製

添加剤 合水けい酸

を、主剤100gに対して着光顔料を2~5

バール顔料 日本光研工業製

添加剤 合水けい酸

を、主剤100gに対してバール顔料を2~5g、望ましくは3g、添加剤を5~0.1g、望ましくは1gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第1ペーストを得る。

第2ペースト

硬化剤 ポリチオール(飼コニシ製)

バール顔料 日本光研工業製

添加剤 合水けい酸

を、硬化剤100gに対してバール顔料を2~5g、望ましくは3g、添加剤を5~0.1g、望ましくは1gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第2ペーストを得る。

このようにして形成した第1ペースト、第2ペースト各々は、各々同一量づつを十分攪拌して均一に混合し、所定形状にすると、その後30分程度で硬化し、実用に供することができる。

g、望ましくは3g、添加剤を5~0.1g、望ましくは1gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第1ペーストを得る。

第2ペースト

硬化剤 ポリチオール(飼コニシ製)

着光顔料 日本螢光化学製

添加剤 合水けい酸

を、硬化剤100gに対して着光顔料を2~5g、望ましくは3g、添加剤を5~0.1g、望ましくは1gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第2ペーストを得る。

このようにして形成した第1ペースト、第2ペースト各々は、各々同一量づつを十分攪拌して均一に混合し、所定形状にすると、その後30分程度で硬化し、実用に供することができる。

[第4実施例]

第1ペースト

主剤 ビスフェノールA

以上の各説明においては、添加剤を加えるとして説明したが、製造後早期に使用する場合については添加剤を加えなくても使用可能であると共に、特に着光顔料よりもはるかに重量が軽い他の顔料については添加剤がなくても主剤あるいは硬化剤と分離することができない。

[発明の効果]

以上説明したように、本発明は、着色ペーストを、主剤を主体とした第1ペーストと、硬化剤を主体とした第2ペーストに分けたので、硬化が防止できると共に、使用時には所定の形状に硬化させることができるので、簡単に装飾品等も形成できる。

代理人 弁理士 黒田 博道



代理人 弁理士 中村 盛夫



手続補正書

昭和60年3月15日

特許庁長官 志賀 学 殿

1. 事件の表示

昭和60年特許願第24359号

2. 発明の名称

着色ペースト

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

名称 根本特殊化学 株式会社

4. 代理人

住所 東京都中央区銀座2丁目15番12号
仲光ビル5階 ☎ 03(543)2608㈹

氏名(8893)弁理士 黒田 博道



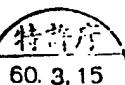
5. 補正の対象

明細書の「発明の詳細な説明」の欄

6. 補正の内容

(1)明細書第8頁第3行目の「5~60分の時間経過」を、「5~60分の時間経過、あるいは場合によっては24時間程度の経過」に補正する。

(2)明細書第10頁第6行目、第11頁第10行目、第12頁第6行目、第13頁第9行目の「錫コニシ」を、「コニシ錫」に補正する。



60.3.15

訂正明細書

1. 発明の名称

着色ペースト

2. 特許請求の範囲

1. エポキシ樹脂を主体とする主剤と、この主剤を硬化させるための硬化剤とを別体に形成すると共に、これら的一方または双方に顔料を添加したことを特徴とする着色ペースト。

2. 顔料を、蓄光顔料とした特許請求の範囲第1項記載の着色ペースト。

3. 蓄光顔料を、主剤及び硬化剤に対して50~150重量%添加した特許請求の範囲第2項記載の着色ペースト。

4. 助剤として、主剤及び硬化剤に微粉けい酸類を主体とする分離、沈降防止剤を2~10重量%添加した特許請求の範囲第3項記載の着色ペースト。

5. 蓄光顔料を、主剤のみに50~150重量%添加した特許請求の範囲第2項記載の着色ペー

手続補正書

昭和60年6月7日

特許庁長官 志賀 学 殿

1. 事件の表示

昭和60年特許願第24359号

2. 発明の名称

着色ペースト

3. 補正をする者

事件との関係 特許出願人

名称 根本特殊化学 株式会社

4. 代理人

住所 東京都中央区銀座2丁目15番12号
仲光ビル5階 ☎ 03(543)2608㈹

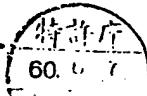
氏名(8893)弁理士 黒田 博道

5. 補正の対象

明細書

6. 補正の内容

明細書を別紙訂正明細書に補正する。



60.6.7

スト。

6. 顔料として、パール顔料を2~10重量%添加した特許請求の範囲第1項記載の着色ペースト。

7. 顔料として、有機顔料を2~5重量%添加した特許請求の範囲第1項記載の着色ペースト。

6. 顔料として、蓄光顔料を2~5重量%添加した特許請求の範囲第7項記載の着色ペースト。

3. 発明の詳細な説明

【産業上の利用分野】

本発明は着色ペースト、更に詳しくは2つに分けてチューブもしくはピン等に入れ、それらを混合することによって簡単にプラスチック成形品を形成することが可能な着色ペーストに関し、アクセサリー、釣具、家具等に容易に付着させることができるものである。

【従来の技術】

従来より、プラスチック製品はいずれも完成品として販売されていたために、購入者は販売品の

中から選んで購入することしかできなかった。

特に、暗所においても光を発することから、時計の針、キーホルダーあるいは壁掛けスイッチ等に用いられていた蓄光体は、工場で時計の針に塗布されたり、あるいはキーホルダー、壁掛けスイッチに成型され、すべて完成品としての状態で出荷されていた。

【発明が解決しようとする問題点】

このような各種のプラスチック製品は、アクセサリーあるいは実用小物として用いる場合には、完成品のみならず、自由なデザインのものを作りたいとの要求があるにも係らず、従来は提供されていなかった。

また特に、蓄光顔料をプラスチックに加えた蓄光体は、暗所において光を発するという特徴より、前述したような用途に限られることなく広範な用途に用いることが可能であり、かつそのような需要があるにもかかわらず、従来は完成品としてのみ出荷されていたために、そのような需要に答えることができなかつた。

本発明に係る蓄光ペーストは、エポキシ系樹脂を主体とする主剤と、ポリアミド等を主体とする硬化剤とを別体として形成し、これら主剤及び硬化剤の一方または双方に顔料を加えたものである。

次に顔料として蓄光顔料を用い、かつこの蓄光顔料を主剤及び硬化剤の双方に加えた場合について説明する。

主剤としては、エポキシン樹脂を主体としたものを用いる。例えば、ビスフェノールA、ビスフェノールF、レゾルシノール、フェノールノボラック、クレゾールノボラック等のフェノール類のグリシジルエーテル、

ポリエチレングリコール、ポリプロピレングリコール等のアルコール類のグリシジルエーテル、フタル酸、イソフタル酸、テトラヒドロフタル酸等のカルボン酸類のグリシジルエステル、

アニリン、イリシアヌール酸等の窒素原子に結合した活性水素をグリシジル基で置換したもの等のグリシジル型エポキシ樹脂、

それらの原因としては、使用前に硬化してしまうので、実用的でないものであると共に、特に蓄光ペーストは、蓄光顔料の比重が主剤あるいは硬化剤の比重よりも重いために、蓄光顔料が徐々に沈降してしまい使用できなくなってしまうことにあった。

そこで本発明は、前述した問題点を解消するために、硬化を防止して長期間の使用に耐えると共に、特に比重が重い蓄光顔料に対しては、その沈降を防止し、長期間安定して使用可能とした着色ペーストを提供することを目的として創作されたものである。

【問題点を解決するための手段】

そこで本発明は、上記目的を達成するために、硬化を防止するために、主剤と硬化剤とを別体として形成すると共に、これら主剤及び硬化剤の一方又は双方に顔料を添加したことをその要旨とする。

【実施例】

以下、本発明の実施例を説明する。

分子間のオレフィン結合を過酸等でエポキシ化して得られる脂環型エポキシ等を用いることができる。

またこの主剤の粘度を低下させるための添加剤としては、反応性稀釈剤としてのエポキシ基を持っている低粘度樹脂、非反応性稀釈剤としてのエポキシ基を持たない低粘度樹脂、耐水性、耐熱性を向上させるための添加剤としては、変性剤としてのフェノール、キシレン等がある。

硬化剤としては、エポキシン樹脂を硬化させるものであって、脂肪族または芳香族ポリアミン、ポリアミド、ポリメルカブタン、ポリカルボン酸無水物、BF3-モノエチルアミン錯化合物等を用いることができる。

またこの硬化剤の粘度を低下させるための添加剤としては、非反応性稀釈剤を用いることができる。

蓄光顔料としては、硫酸亜鉛系焼光体を用いることができる。

このような主剤及び硬化剤に対して、蓄光顔料

を 50 ~ 150 重量% 添加すると共に、これに添加剤として、分離防止剤、沈降防止剤としての効果を有する微粉けい酸類を 2 ~ 10 重量% 添加する。着光顔料の添加量が 50 重量% 以下であると十分な着光性能を発揮することができず、逆に 150 重量% 以上であると、ペースト状態の維持が困難となるものである。また添加剤を 2 重量% 以下とすると主剤及び硬化剤と着光顔料とが分離し易く、逆に 10 重量% 以上添加すると作業性が悪くなるものである。

またここで添加剤としての微粉けい酸類としては、含水けい酸、含水けい酸カルシウム、含水けい酸アルミニウム等を用いることができる。なおこれら微粉けい酸類の粒子径は、5 ~ 100 ナノm であり、かつ 30 ~ 300 の BET 表面積を有するという特徴がある。

これらの各材料を、攪拌して着光顔料を加えたペースト状の主剤と、着光顔料を加えたペースト状の硬化剤とを得るものである。

また実際の使用時には、これら着光顔料を加え

単独で、あるいは混合して所望の色を作り出した後、それを硬化剤にて硬化させて使用することができる。

主剤、硬化剤、着光顔料は、前記実施例と同様なものを使用することができるので、詳細な説明を省略する。

また更に添加量等も同様なので、説明を省略する。

このようにして得た着色ペーストは、イアリング、ブローチ等の装飾品等として用いることができるだけでなく、特に着光顔料を用いたものは、釣具等の夜間識別部品として使用できる。

次に実際に使用した樹脂、顔料及び混合量等を明示した実施例について説明する。

【第 1 実施例】

第 1 実施例

第 1 ベースト

主剤 ビスフェノール A

着光顔料 硫化亜鉛系着光体

(G-S-S : 根本特殊化学製造)

たペースト状の主剤と、着光顔料を加えたペースト状の硬化剤とを混合して、所定の形状とすることによって、5 ~ 60 分の時間経過、あるいは場合によっては 24 時間程度の経過で硬化することとなる。

なおこれら着光顔料を加えたペースト状の主剤及び着光顔料を加えたペースト状の硬化剤を別々にチューブに充填する場合は、作業効率の点より、加熱して粘度を低下させて行なうことが望ましい。

次に、顔料として着光顔料を用いるものの、この着光顔料を主剤のみに混合する場合について説明する。

このような使用に関しては、例えば異った色の着光顔料を添加した主剤、あるいは異った色の螢光顔料、パール顔料、有機顔料を添加した主剤を多数用意しておき、これら多数の主剤に対して单一の硬化剤を使用するような場合に適している。即ち、通常販売されている絵の具のように、多数の色の主剤を用意して、それら各色の主剤を

添加剤 含水けい酸

を、主剤及び着光顔料を各々 100 g に対して、添加剤を 6 g の割合で添加した後、これら各材料を攪拌した均一に混合し、第 1 ベーストを得る。

第 2 ベースト

硬化剤 ポリチオール (コニシ製造)

着光顔料 硫化亜鉛系着光体

(G-S-S : 根本特殊化学製造)

添加剤 含水けい酸

を、硬化剤及び着光顔料を各々 100 g に対して、添加剤を 6 g の割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第 2 ベーストを得る。

このようにして形成した第 1 ベースト、第 2 ベースト各々は、各々同一量づつを十分攪拌して均一に混合し、所定形状にすると、その後 30 分程度で硬化し、実用に供することができる。

【第 2 実施例】

第 1 ベースト

主剤 ビスフェノールA
 蛍光顔料 硬化アセチル系焼光体
 (G-S-S: 根本特殊化学製)
 添加剤 ディスパーサー202
 (日本光研工業製)

を、主剤及び螢光顔料を各々100gに対して、添加剤を5~0.1g、望ましくは1gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第1ペーストを得る。

第2ペースト

硬化剤 ポリチオール(コニシ製)

このようにして形成した第1ペースト、第2ペースト各々は、各々同一量づつを十分攪拌して均一に混合し、所定形状にすると、その後30分程度で硬化し、実用に供することができる。

[第3実施例]

第1ペースト

主剤 ビスフェノールA
 蛍光顔料 日本螢光化学製
 添加剤 合水けい酸

主剤 ビスフェノールA
 パール顔料 日本光研工業製
 添加剤 合水けい酸

を、主剤100gに対してパール顔料を2~5g、望ましくは3g、添加剤を5~0.1g、望ましくは1gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第1ペーストを得る。

第2ペースト

硬化剤 ポリチオール(コニシ製)
 パール顔料 日本光研工業製
 添加剤 合水けい酸

を、硬化剤100gに対してパール顔料を2~5g、望ましくは3g、添加剤を5~0.1g、望ましくは1gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第2ペーストを得る。

このようにして形成した第1ペースト、第2ペースト各々は、各々同一量づつを十分攪拌して均一に混合し、所定形状にすると、その後30分

を、主剤100gに対して螢光顔料を2~5g、望ましくは3g、添加剤を5~0.1g、望ましくは1gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第1ペーストを得る。

第2ペースト

硬化剤 ポリチオール(コニシ製)

螢光顔料 日本螢光化学製

添加剤 合水けい酸

を、硬化剤100gに対して螢光顔料を2~5g、望ましくは3g、添加剤を5~0.1g、望ましくは1gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第2ペーストを得る。

このようにして形成した第1ペースト、第2ペースト各々は、各々同一量づつを十分攪拌して均一に混合し、所定形状にすると、その後30分程度で硬化し、実用に供することができる。

[第4実施例]

第1ペースト

程度で硬化し、実用に供することができる。

[第5実施例]

第1ペースト

主剤 ビスフェノールA
 蛍光顔料 硬化アセチル系焼光体
 (G-S-S: 根本特殊化学製)
 パール顔料 日本光研工業製
 添加剤 合水けい酸

を、主剤100gに対して螢光顔料50~150g、望ましくは100g、パール顔料を1~5g、望ましくは2g、添加剤を5~0.1g、望ましくは1gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第1ペーストを得る。

第2ペースト

硬化剤 ポリチオール(コニシ製)
 蛍光顔料 硬化アセチル系焼光体
 (G-S-S: 根本特殊化学製)
 パール顔料 日本光研工業製
 添加剤 合水けい酸

を、硬化剤100gに対して蓄光顔料50~150g、望ましくは100g、パール顔料を1~5g、望ましくは2g、添加剤を5~0.1g、望ましくは1gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第2ペーストを得る。

このようにして形成した第1ペースト、第2ペースト各々は、各々同一量づつを十分攪拌して均一に混合し、所定形状にすると、その後30分程度で硬化し、実用に供することができる。

また第2実施例のように第1ペーストのみに蓄光顔料、パール顔料及び添加剤を添加して形成し、第2ペーストを硬化剤のみによって形成しても、同様の硬化時間で実用の供することができる。

[第6実施例]

第1ペースト

主剤 ビスフェノールA
蓄光顔料 硫化亜鉛系螢光体
(G-S-S: 根本特殊化学製型)

このようにして形成した第1ペースト、第2ペースト各々は、各々同一量づつを十分攪拌して均一に混合し、所定形状にすると、その後30分程度で硬化し、実用に供することができる。

また第2実施例のように第1ペーストのみに蓄光顔料、パール顔料及び添加剤を添加して形成し、第2ペーストを硬化剤のみによって形成しても、同様の硬化時間で実用の供することができる。

以上の各説明においては、添加剤を加えるとして説明したが、製造後早期に使用する場合については添加剤を加えなくても使用可能であると共に、特に蓄光顔料よりもはるかに比重が軽い他の顔料については添加剤がなくても主剤あるいは硬化剤と分離することがない。

[発明の効果]

以上説明したように、本発明は、着色ペーストを、主剤を主体とした第1ペーストと、硬化剤を主体とした第2ペーストに分けたので、硬化が防止できると共に、使用時には所定の形状に硬化

蓄光顔料 日本蓄光化学製型

添加剤 含水けい酸

を、主剤100gに対して蓄光顔料50~150g、望ましくは100g、蓄光顔料を0.2~5g、望ましくは2g、添加剤を5~0.1g、望ましくは1gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第1ペーストを得る。

第2ペースト

硬化剤 ポリチオール(ユニシ製型)

蓄光顔料 硫化亜鉛系螢光体

(G-S-S: 根本特殊化学製型)

蓄光顔料 日本蓄光化学製型

添加剤 含水けい酸

を、硬化剤100gに対して蓄光顔料50~150g、望ましくは100g、蓄光顔料を0.2~5g、望ましくは2g、添加剤を5~0.1g、望ましくは1gの割合で添加した後、これら各材料を攪拌して均一に混合し、第2ペーストを得る。

させることができるので、簡単に装飾品等も形成できる。

代理人 弁理士 黒田 博道

代理人 弁理士 中村 盛夫